

大都市における社会生活上の居住性(その2)

——多摩ニュータウンと共同性・社会関係・社会的地位——

3. ローカル・アタッチメント再考(II)*

——住民類型論序説——

高橋 和宏** 野辺 政雄***

要 約

都市住民の地域活動や付き合いのパターンを探り、これが地域への愛着や定住意識といったローカル・アタッチメントといかに関連するかを明らかにすることが、本稿の目的である。林の数量化3類による分析で、(1)地域活動・付き合い関与意欲という因子が存在すること、(2)それらへ関与する際、全人格をもってするか、人格のごく一部をもってするかという判断基準が割合一般的に存在すること、(3)地域への愛着は、活発な地域活動参加や多なる付き合いと係り合っていること、(4)地域活動や付き合いに関与しているので、定住を希望する住民と、それらに関与しないので、定住を希望する住民がいることが、明らかになった。これらの発見は、地域社会について生活感覚が全く異なる2種類の住民が存在することを呈示する。

1 問題の所在

現在、都市社会学でコミュニティ形成との係わりにおいて、住民の望ましい地域集団や近隣付き合いの形成が、関心を集めている。倉沢によれば、都市における自己処理能力の低さ、そして専門サービスによる共同処理システムは、都市的生活様式の基本的特徴である。これが、都市生活が懐抱するところの様々な問題を惹起している。そこで、住民が自分たちの幸福な生活を実現するために、自発的に形成・参加し、自律的に運営し、相互の連帯と協力によって地域社会の共通の問題の解決に当る、そのような共同生活のあり方——コミュニティ——が模索されている¹⁾。

卑近な例を引用して恐縮であるが、筆者が居住しているマンションにはいままで自治会がなかったので、共用部分の管理が不十分で、マンションの価格が低下していた。そこで、一部の居住者が発起人となり、自治会を組織した。現在、それは管理会社に種々の具体的要求を提出し、マンションの管理改善にかなり活発に運動を展開

している。筆者はかくの如き都市生活の実相を観察すると、利益の防衛という理由であるけれども、住民が都市生活上の必要に相応し、集団形成を自由・活発に行なうことを通して、都市生活にかなり柔軟に適應していることを感得する。そこで、住民は都市生活に適應した結果——たとえこれが不十分であっても——、どういった地域活動参加や近隣付き合いのパターンを示すかに感興を覚えるに至った。

本分析の目的はその延長にあると言えるが、次の二点を明らかにすることである。

第一に、地域活動参加と近隣・親族・友人付き合いのパターンを顕示するとともに、これを規定する要因を類推することである。たとえば、地域のサークル活動に参加している人は、同時に、どういった地域活動に参加しようとする可能性が高いであろうか。また、どういった要因によって、人々は地域活動へ参加したり、付き合いを形成したりするのであろうか。

第二に、ローカル・アタッチメント、すなわち地域への愛着や定住意識は、地域活動参加や近隣・親族・友人付き合いといかに関連しているかを確認することである。

* 本稿は高橋の指導のもとに、野辺がデータの解析・執筆を行なったものである。

** 東京都立大学都市研究センター・人文学部

*** 東京都立大学大学院生

倉沢は、どこに住もうと、その地域社会を連帯して良くしようとする意識（コミュニティ意識）の形成の萌芽を指摘した²⁾。つまり、ローカル・アタッチメントがなくても、地域集団や近隣付き合いが形成され、地域を改善する運動が発生する可能性を展望した。

一方、鈴木広は、特定の地域に根ざしたローカル・アタッチメントがない人には、地域をより良くしようとする意識や運動を期待しえないと論ずる³⁾。

では、ローカル・アタッチメントは地域活動への参加や付き合い形成、とりわけ地域改善のためのそれらと、どのように結び付いているのであろうか。本調査を行なうに当たり、この点について、次のような仮説を設定した。ローカル・アタッチメントを持っている人ほど、地域活動に活発に参加し、近隣・親族・友人付き合いをしている。

無論、本調査で最終的な結論を断ずることはできないけれども、将来の調査の濫觴とすべく、嚮導仮説を提起したい。

2 分析方法の提示

主婦に面接調査を実施したので、今回、主婦についてのみ分析し、夫のデータについては後日、分析を期したい。

まず、第一の問題を解明するため、地域活動及び近隣・親族・友人付き合いの項目を林の数量化3類により分析する。次に、それらの項目とローカル・アタッチメントの項目を統合したものを同一手法で分析し、第2の問題に取り組む。

周知の如く、林の数量化3類により現出した根は、次の意味を持つ。根を座標にプロットしたとき、それら相互の距離が接近していることは、属性（ここでは、地域活動への参加・非参加、近隣・親族・友人付き合いの多寡、及びローカル・アタッチメントを覚えるか否か）に対する人々の反応パターンが類似していることを表示する。そこで、それらの分布を観照することにより、因子を推察できる。また、座標の原点の近傍にプロットされた属性に反応することは、一般的に言って、他の属性にランダムな反応をすることを示す。すなわち、原点の近傍にプロットされたところのその属性から、その反応の独自性を剔出できぬ。

さて、調査に採用した地域活動、近隣・親族・友人付き合い、及びローカル・アタッチメントの項目は表1の通りである。同表に、それらの項目に対する回答の分類も記しておいた。

サンプルがそれぞれ100人弱の4つの地域——永山公団賃貸住宅、永山ハイツ、諏訪都営住宅、諏訪公団分譲住宅——を調査した。地域活動として、廃品回収・緑化活動、

見学会・講習会、祭・運動会、地域のサークル・趣味の会への参加・非参加を調査した。サンプルが地域内に形成している近隣付き合いを悉皆調査した。そこで、近隣付き合いは、地域内で付き合っているサンプルが回答した相手の人数（家の数）である。それについて、親密度において異なる3通りの間い方をし、それぞれ弱紐帯、中紐帯、強紐帯と命名した。更に、多摩ニュータウン内・外に居住する家族や親戚でよく付き合っている人数（家の数）、そして多摩ニュータウン内・外に居住する、普段から気軽に行き来し合っている人数を調査した。この他に、サンプルが地域に関心を払っている程度——具体的には、地域において問題になっている事項を認知している程度——を測定した。その事項として、尾根幹線住民運動を採用し、その存在の認知を質問した。また、実際のそれへの参加も調査した。尾根幹線住民運動の経緯は次のようである。朝夕の通勤のため、この地域の交通渋滞が著しい。そこで、当局は、都心と多摩ニュータウンを結ぶ幹線道路（尾根幹線）の建設を計画した。しかし、この道路の開通により、騒音・排気ガスといった種々の不都合も生起する。一部住民はこれに配慮し、尾根幹線建設反対運動を組織した。一方、その道路の利便性に注目する他の住民は、建設促進を提唱している。

サンプルがほぼ半数ずつになるように、調査項目の回答を2つに分類し直した。表1に提示した以外の回答（たとえば、「判らない」や「答えたくない」）は、その項目を分析するときのみ、除外した。

3 調査結果の提示

(1) 地域活動及び近隣・親族・友人付き合いについて

まず、調査対象となった4つの地域における、地域活動と近隣・親族・友人付き合いに関する項目（表1における(1)~(11)の項目）を林の数量化3類で分析した。導出された根を座標にプロットしたものが、表2~9である。差し当たり、第3根までを表に示した。表2、表4、表6、表8は第1根と第2根を、表3、表5、表7、表9は第1根と第3根を組み合わせて、座標にプロットしたものである。

既述したように、林の数量化3類により現出した根の分布は因子を呈示する。本分析に引き戻して言えば、析出した根の配置は、地域活動や近隣・親族・友人付き合いを規定する因子を表示する。しかし、それは因子の内容を歴然と指示するものではない。全体における根の連関の布置を観察することにより、分析者は、それがどういった因子を呈示するかを解読しなければならぬ。

まず、永山公団賃貸住宅に着手しよう。第1因子、つまり表2における第1軸は消極—積極対処の軸と解釈できる。すなわち、ある地域活動乃至付き合い項目に関与

表1 調査に採用した地域活動、付き合い、及びローカル・アタッチメントの項目

1. 地域活動
 - (1) 廃品回収・緑化活動

参加(P) (回答例)	積極的に、なるべく
非参加(C) (回答例)	気が向いたら、あまり参加しない、参加しない
 - (2) 見学会・講習会

参加(P) (回答例)	積極的に、なるべく
非参加(C) (回答例)	気が向いたら、あまり参加しない、参加しない
 - (3) 祭・運動会

参加(P) (回答例)	積極的に、なるべく
非参加(C) (回答例)	気が向いたら、あまり参加しない、参加しない
 - (4) 地域のサークル・趣味の会

参加(P) (回答例)	積極的に、なるべく
非参加(C) (回答例)	加入していない、気が向いたら、あまり参加しない、参加しない
2. 近隣付き合い
 - (5) 弱紐帯 (各調査対象地域内において、会えば挨拶する程度の人)

多い	17人以上
少い	0～16人
 - (6) 中紐帯 (各調査対象地域内において、会えば世間話をする程度の人)

多い	9人以上
少い	0～8人
 - (7) 強紐帯 (各調査対象地域内において、普段から気軽に行き来し合っている程度の人)

多い	3人以上
少い	0～2人
3. 親族付き合い
 - (8) 地域内親族 (多摩ニュータウン内の家族や親戚でよく付き合っている人)

多い	1人以上
少い	0人
 - (9) 地域外親族 (多摩ニュータウン外の家族や親戚でよく付き合っている人)

多い	4人以上
少い	0～3人
4. 友人付き合い
 - (10) 地域内友人 (近隣付き合いで回答した人を除外し、多摩ニュータウン内で、普段から行き来し合っている人)

多い	4人以上
少い	0～3人
 - (11) 地域外友人 (多摩ニュータウン外で、普段から行き来し合っている人)

多い	4人以上
少い	0～3人
5. その他
 - (12) 地域問題認知 (尾根幹線住民運動の認知)

多い (回答例)	よく知っている、少しぐらい知っている
少い (回答例)	あることぐらい知っている、全く知らない
 - (13) 尾根幹線住民運動

参加(P) (回答例)	積極的、少しぐらい、あまり
非参加(C) (回答例)	全く係わらなかった
6. ローカル・アタッチメント
 - (14) 定住希望

定住希望 (回答例)	ずっと住み続けたい
移転希望 (回答例)	2・3年で移りたい、2・3年で移りたいが不可能、将来移りたい
 - (15) 愛着

多い (回答例)	愛着を感じている、どちらかと言えば愛着を感じる
少い (回答例)	どちらかと言えば愛着を感じない、愛着を感じない、どちらとも言えない

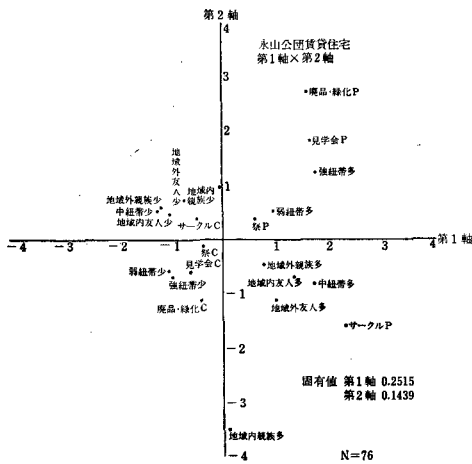


表 2 永山公団賃貸住宅における地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第2根）

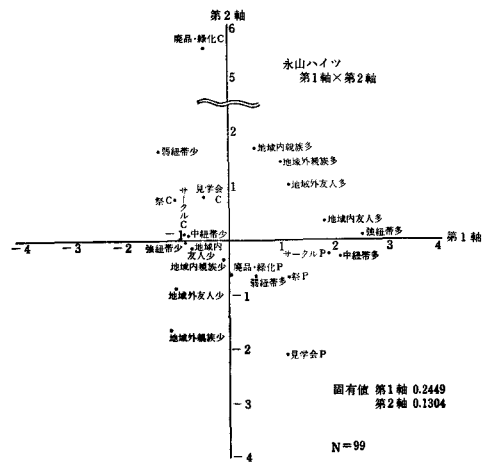


表 4 永山ハイツにおける地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第2根）

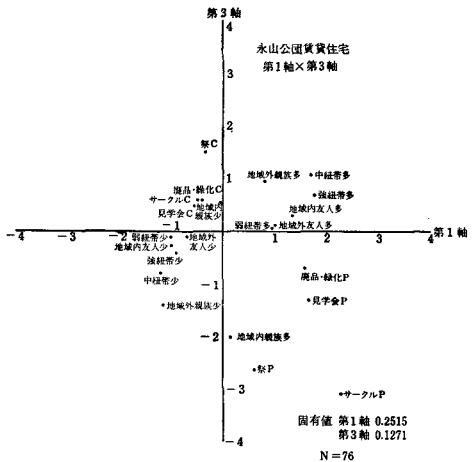


表 3 永山公団賃貸住宅における地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第3根）

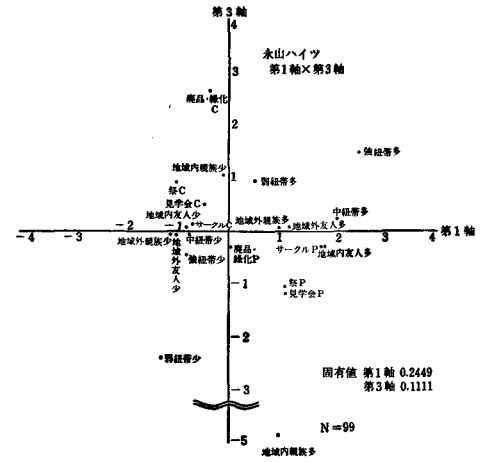


表 5 永山ハイツにおける地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第3根）

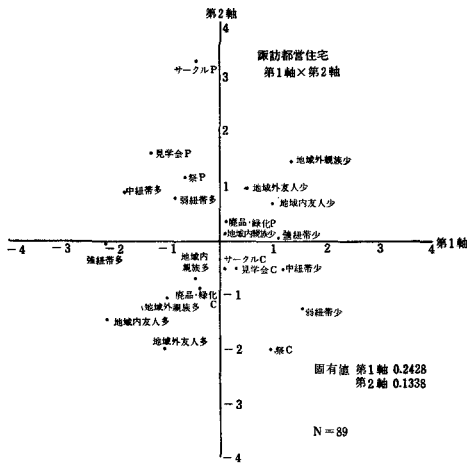


表 6 諏訪都営住宅における地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第2根）

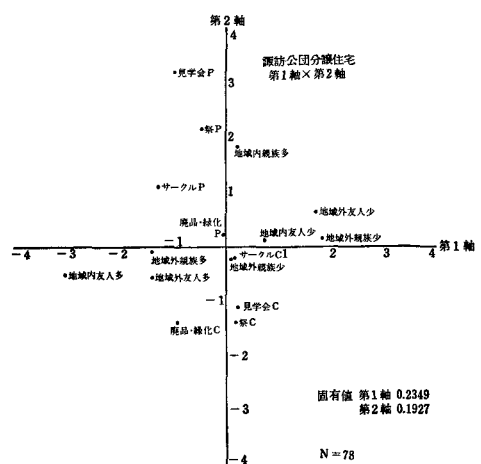


表 8 諏訪公団分譲住宅における地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第2根）

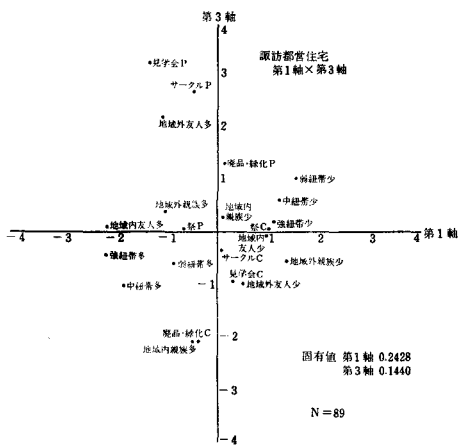


表 7 諏訪都営住宅における地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第3根）

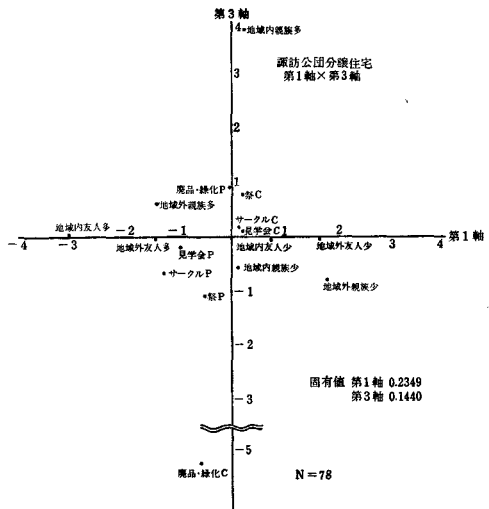


表 9 諏訪公団分譲住宅における地域活動と近隣・親族・友人付き合い（第1根と第3根）

(地域活動に参加乃至夥多なる付き合い)している人は、他の項目にも関与している可能性が高い。あるいは、調査した地域活動及び付き合い項目に積極的に関与している人と消極的に関与している人に峻別される。いわば、地域活動参加や付き合い形成意欲を想定できる。

地域活動参加や付き合い形成は、次のような視座からも分類できよう。ある目的を実現するために、地域活動に参加したり、付き合いを形成する場合(利便性追求的関与)と、自らの情緒を充足するために、それらを行なうこと自体が目的となっている乃至それらに拘泥的に埋没シカタルシスを行なう場合(情緒追求的関与)である。第2軸は、この利便性追求—情緒追求の軸である。廃品回収・緑化活動、見学会といった利便的な地域活動や付き合い項目への関与は、サークル、友人付き合い、中紐帯といった情緒追求的なその項目に対峙する。その対は関与の際の判断基準あるいは認知構造を構成している。つまり、情緒を充足するためあるいはある目的を実現するためという判断によって、人々はそれらへの関与を決定していると予想される。ただし、この判断基準は、態度にすぎないので、実際の関与は状況によって変わりうる。項目の全体的な布置から判断すると、強紐帯は利便追求的な、地域内親族は情緒追求的な性格が濃厚であることを看取できよう。

第3軸は、地域活動—付き合いの軸である。この軸により、廃品回収・緑化活動、見学会・講習会、祭・運動会、サークル・趣味の会といった地域活動と近隣・親族・友人付き合いは弁別される。これによって、地域活動へ参加するか、あるいは付き合いを形成するかという判断基準が存在することが推察される。

永山ハイツに移ろう。第1軸は消極—積極対処の軸で地域活動参加や付き合い形成意欲の存在を示唆する。

第2軸は強紐帯、親族・友人付き合いを地域活動と中・弱紐帯から区別している。前者は全人格をもって感情的に融合しあう(ゲマインシャフト的)関係である。一方、後者は人格のごく一部のみをもってする(ゲゼルシャフト的)関係である。つまり、この軸は濃厚—淡白関与の軸と解釈できる。そして、人々が濃厚関与あるいは淡白関与をするかという判断基準によって、地域活動に参加し、付き合いを形成することが予想される。

諏訪都営住宅と諏訪公団分譲住宅を瞥見しよう。正負が逆になっている場合もあることを除外すれば、両地域の根の分布は、永山ハイツのそれと類似している。すなわち、両地域の第1軸及び第2軸は永山ハイツのそれらと同様のことを意味する。ただし、第1軸における廃品回収・緑化活動は例外である。筆者の手違いにより、諏訪公団分譲住宅における近隣付き合いのデータは欠如している。

4つの地域の地域活動参加と付き合い形成の分析を綜

合すると、次の点を洞察できる。

まず、4つの地域すべてで、第1軸が消極—積極対処の軸であった。つまり、全地域で地域活動参加や付き合い形成の因子として、参加・形成意欲を推定できる。鈴木広らは、コミュニティ意識を構成するものとして、コミュニティ・モラルを想定しているが、当該分析結果はこれを首肯する⁴⁾。

次に、永山ハイツ、諏訪都営住宅、諏訪公団分譲住宅で、地域活動に参加したり付き合いを形成する際に、濃厚関与あるいは淡白関与をするという判断基準があることが予想された。この判断基準が割合一般的に存在しているように思われる。

(2) ローカル・アタッチメントについて

ローカル・アタッチメントは地域活動や付き合いといかに関連するかをみてゆこう。これらすべての項目と尾根幹線住民運動に係わる項目を統合したもの(表1における(1)~(5)の項目)を林の数量化3類で分析した。析出した根を座標にプロットしたものが表10~17である。第1の問題の分析と同様に、第3根までを表に示した。表10、表12、表14、表16は第1根と第2根を、表11、表13、表15、表17は第1根と第3根を組み合わせ、座標にプロットしたものである。

4つの全調査対象地域で、地域への愛着が地域活動参加や付き合い形成と関連していることを看取できる。

ところが、定住希望について、すべての地域で共通な一定の傾向を指摘できぬ。すなわち、分析結果を検討すると、第1軸における定住希望の根の配置が4つの地域でまちまちである。永山公団賃貸住宅や諏訪公団分譲住宅では、定住希望は地域活動への参加や付き合いの形成と関連していると想定できる。一方、永山ハイツや諏訪都営住宅では、定住希望は地域活動への非参加や僅少な付き合いと関連を示している。とりわけ、諏訪都営住宅では、座標にプロットされた定住希望の根は原点からかなり離れた位置にあるので、その傾向が比較的顕著であることが判る。

4 分析結果の検討と展開

調査対象地域によって、定住希望と地域活動・付き合いとの関係が齟齬することに刮目したい。この撞着した分析結果は、人々が地域に定住を希望するところの社会環境上の理由が多様であることを提起するように思われる。すなわち、ある人々は地域活動に頻繁・活発に参加することや濃密な人々との付き合いに魅力を感じ、定住を希望する。彼らは人間的な触れ合いに重きを置き、言ってみれば「長屋型」の生活感覚を持っている。それに対し、他の人々は周囲の人々が余りお節介をやかぬことに魅力を感じ、定住を希望する。彼らは近所付き合いな

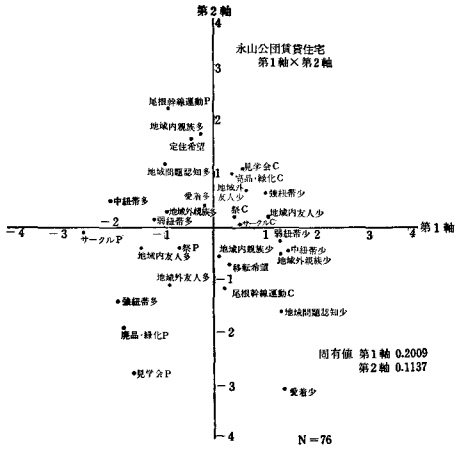


表 10 永山公団賃貸住宅における地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント（第1根と第2根）

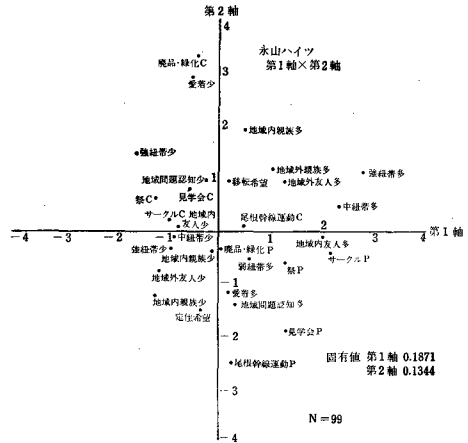


表 12 永山ハイツにおける地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント（第1根と第2根）

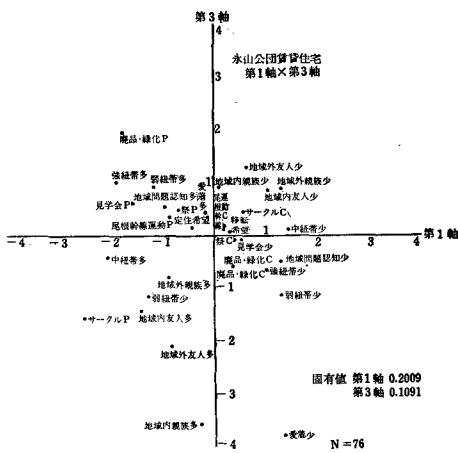


表 11 永山公団賃貸住宅における地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント（第1根と第3根）

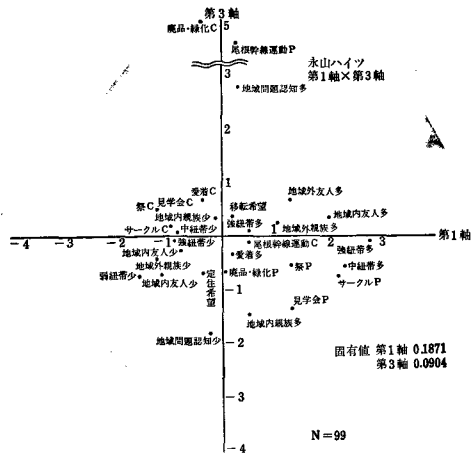


表 13 永山ハイツにおける地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント（第1根と第3根）

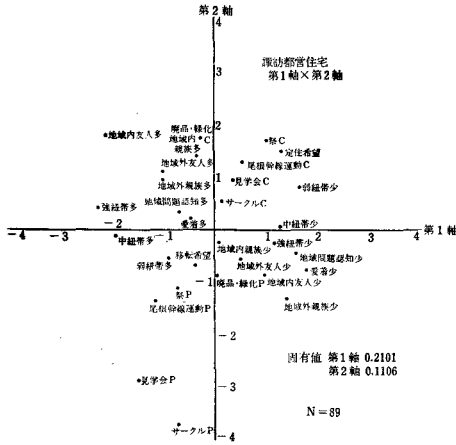


表 14 諏訪都営住宅における地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント(第1根と第2根)

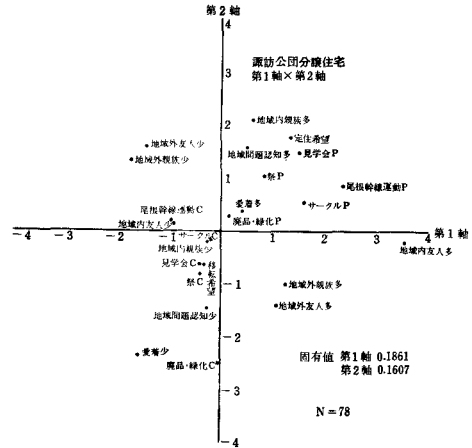


表 16 諏訪公団分譲住宅における地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント(第1根と第2根)

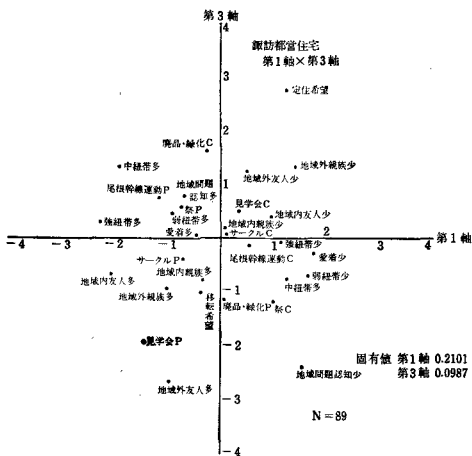


表 15 諏訪都営住宅における地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント(第1根と第3根)

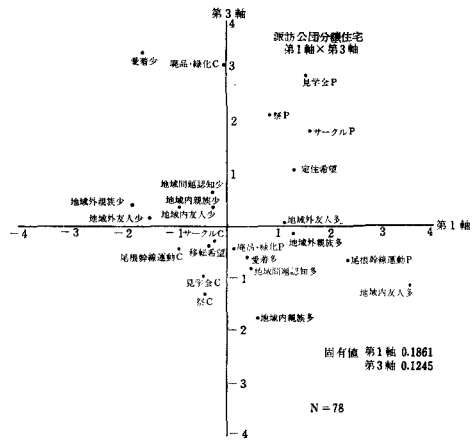


表 17 諏訪公団分譲住宅における地域活動・付き合いとローカル・アタッチメント(第1根と第3根)

ど煩わしいと考えており、いわば「ホテル型」の生活感覚を持っている。

こうした都市住民の2類型は、グリアによって既に発見されている。彼はロサンゼルスの中から、社会・経済的地位と黒人率でほぼ等しいけれども都市化度——ここでは出生率、女性就業率、一戸建ての割合の3指標が採用されている——が異なる2地区を取り出した。この両地区の居住者を調査したところ、近隣付き合い、地区内に友人を持つこと、地区内の文化行事への参加、地区単位の団体への加入において顕著な相違があった。低都市化地区——出生率が高い、女性就業率が低い、一戸建て住宅の割合が高い——の住民は、それらへの関与の割合が高い。他方、高都市化地区——出生率が低い、女性就業率が高い、一戸建て住宅の割合が低い——の住民は、それ程ではない。両地区のこうした違いは、「地域社会のリーダーを知っているか」という質問においても現われる。低都市化地区の住民の方が、地区のリーダーをよく知っている。つまり、地域社会に関心を払っている。こうした発見もさる事ながら、この論文の卓越さは、居住に満足する理由の違いを調査で明瞭に呈示したことに求められる。両地区の住民は共に居住環境に満足していた。しかし、その理由が相違する。低都市化地区の住民は、まわりの人々が懇意に付き合ってくれるのをその理由にあげた。一方、高都市化地区の住民は、下町に近く、そこへ行くのに便利であるという生活の利便性や周囲の人々が干渉しないことをあげた⁵⁾。

われわれの調査では、居住に満足する理由を問わなかったけれども、本稿で析出した住民類型はグリアのそれに対応すると思われる。

では、この「長屋型」と「ホテル型」の都市住民の類型は、何によって説明されるのであろうか。統計手法を採用した要因分析を行なえなかったため、要因の指摘は不可能である。しかし、「ホテル型」の生活様式をしている諏訪都営住宅居住者の特徴を、あえて抽出すれば次のようになる。そこに入居する際、所得制限がある。そこで、低所得者あるいはブルー・カラーが多く居住している(表18~21)。これが地域活動や付き合いのパターンを規定すると思われる。

本稿の統計手法を採用した分析では、地域活動や付き合いと定住希望の関連において異なる2種類の住民を確認したにすぎない。また、グリアも生活様式が相違する住民の存在を指摘するにとどまっている。それゆえ、今後、住民類型を現出させる要因を探求することが必要である。

5 総括と展望

本分析により、次の4点が判明した。

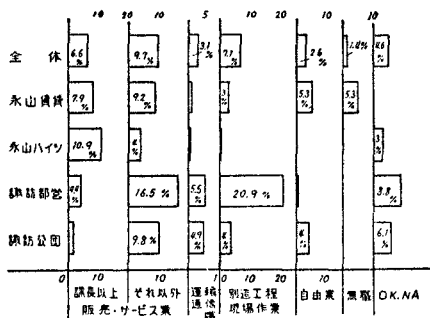
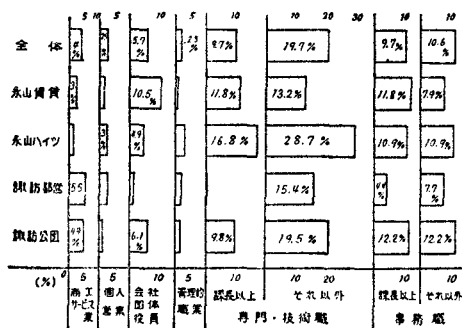


表 18 夫の職業

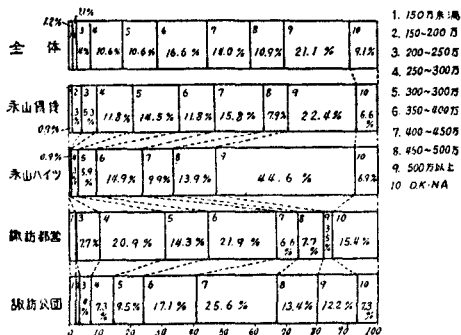


表 19 全収入

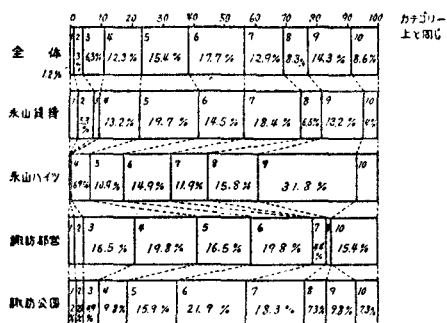


表 20 夫の収入

	高小	中	高	高小	中	高	短大	私大	大	その他
全 体	49.4%			11.1%			16.3%			
東山真賀	52.6%									
東山ハイツ	48.5%			13.9%			22.8%			
東山新田	51.6%			27%						
東山新田	45.1%			13.4%			17.1%			

表 21 妻の学歴

- (1) 地域活動・付き合い関与意欲という因子が存在する。
- (2) 地域活動や付き合いに関与する際、全人格をもってするか、人格のごく一部をもってするかという判断基準が割合一般的に存在する。
- (3) 地域への愛着は、活発な地域活動参加や夥多なる付き合いと係り合っている。
- (4) 地域活動や付き合いに関与しているので、定住を希望する住民と、それらに関与しないので、定住を希望する住民がいる。

しかし、本調査には次のような難点がある。調査した地域活動や付き合い項目が些小である。更に、地域活動や付き合いは、その地域への愛着や定住意識を規定する要因の1つにすぎない。その要因として、たとえば、居住空間の広狭、行政サービス享受可能性、商業施設との近接性、自然環境を枚举できる。これらの要因を統制したうえで、地域活動や付き合いがその地域への愛着や定住希望をいかに規定するかを、開示しなければならない。本調査のこれらの難点を認識して然るべきである。

また、林の数量化3類という分析方法では、傾向の概略的な指摘を行なえるにすぎないという限界も悟るべきである。それゆえ、既述の発見を嚮導仮説とし、次のような分析方法・視角に依拠しつつ、次回の調査を期したい。本調査では、われわれがいくつかの地域活動や付き合い項目を予め列挙し、調査対象者にそれらへの関与を回答させた。それゆえ、地区外の活動が脱落している。「ホテル型」住民にとって、そこにおける活動は非常に重要な意義を持っていると予想される。そこで、住民のすべての活動・付き合いを洗い出し、そのパターンを見出すとともにその構造・機能的連関を追求する調査方法が採用されて然るべきである⁶⁾。

ここで、従前のコミュニティ論を整理し、生活様式の都市化の脈絡で倉沢が唱道するところのコミュニティ形成の特徴と意義を穿鑿しよう。それに沿って本稿の分析を展望したい。

村落コミュニティでは、生活上の諸問題の解決に当って、個人乃至世帯による自己処理能力が高い。また、水

資源のような生活条件の確保をめぐる、部落内の利害が一致をみやすいので、人々が連帯し、素人による相互扶助的なシステムを形成している。これが自己処理が困難な問題を処理する。利害が一致した地域的範囲内で自己の生活を完結できる村落コミュニティにコミュニティの原型を求めることができよう。

都市社会学では、当初、「生活防衛型コミュニティ」が注目を浴びた。地域を共同することにより、何らかの共通の利害が生まれる。それが侵された時、住民が自己の利益を守るために、あるいは住民が共通した利益を拡大するために、彼らが連帯して、共同の問題に対処する。あくまでも自己の権利意識に基づいた連帯である。それゆえ、地域への愛着や定住意識がなくても、利害が合致した問題が提起されれば、それに善処するため連帯する可能性は高い。また、そうした意識も調査で発見された⁷⁾。

しかし、コミュニティ内の利害やコミュニティ間のそれが一致するとは限らない。利害が不一致の場合、地域への愛着や定住意識を持たぬ住民が連帯して、共同の問題に対処することは期待すべくもない。また、身体障害者のように、自己処理能力が低く、かつ「利害防衛型コミュニティ」の利益を充分に享受できぬ住民もいる。

さて、倉沢は生活様式の都市化という脈絡の中で、コミュニティ形成を首唱する。本稿の冒頭で既述した通り、生活様式の都市化によって、都市生活が懐抱するところの様々な問題が生起している。たとえば、主婦が就労するようになり、カギツギが増加した。家族形態の変化で日常的な世話を受けられぬ独居老人が出てきた。核家族化により、親が子供を上手に社会化できぬ。急病を煩ったとき、看護してくれる人がいない等々。倉沢はこれらの問題に対する処方箋として、コミュニティ形成を提言した。行政サービスや商業サービスといった専門的処理システムによる問題処理には明白な限界があり、これを克服するため、彼はコミュニティという地域社会における自律的な相互扶助システムのあり方を模索する。換言すれば、専門的処理システムの中に、相互扶助サブシステムをいかに組み込むことができるかを探究する⁸⁾。

如上のように、倉沢は、コミュニティ形成が社会体系の機能要件であるという論理で、それが必定であることを導出する。従って、それには、専門的処理システム、とりわけ行政サービスによる処理から脱漏した問題をコミュニティに肩代わりさせるという性格があることも看過できない。この性格は、次のような問題を提起する。社会にとって不可欠であるけれども、住民が必ずしも欲求しない活動をコミュニティへ押し付ける可能性がある。独居あるいは同居在宅老人に対し、専門的処理システムの援助やサービスを与えつつ、地域社会に参加させ、その活動を通して人間関係や人間の問題の解決をはかろう

とするのがコミュニティ・ケアである。無論、コミュニティ・ケアは社会的に希求される。だが、コミュニティにとってそうした老人を受け入れることは利益にならないという理由で、拒否されるかもしれない。このように社会の機能要件と個人の欲求がコミュニティという場裡で乖離する可能性がある。生活様式の都市化の脈絡の中で、コミュニティ形成を提起しても、「生活防衛型コミュニティ」の場合と同様に、コミュニティ内の利害やコミュニティ間のそれが一致する根拠を見出すことは至難である。

ときに、コミュニティの他に、諸々の自律的な相互扶助システムを思い付く。管見によれば、職場を中枢とし職員の家族をも包含して成立するところのインフォーマル集団に、自律的な相互扶助処理システムとしての役割を期待しうる⁹⁾。コミュニティを含めた種々の自律的な相互扶助システムの間で、またそれらの自律的な相互扶助システム、専門的処理システム、及び個人乃至家族による処理の間での役割分担について、一般的な合意があるとは言い難い。そこで、都市生活の様々な問題を処理する方が多様であり、コミュニティの役割に対する住民の期待も様々であることが認識されるべきである。

ここで、コミュニティに期待されている役割を情緒的 emotional な役割と手段的 instrumental なそれに峻別してみよう。社会体系の機能要件として、コミュニティ形成を提起する場合、それに期待された役割は情緒的なそれだけに限定されない。同じ志向の人々を近隣に居住させる等の措置によって、和気藹々とした雰囲気の中で情緒の安定を得るといった、コミュニティに期待された情緒的な役割について、相対的に、合意をみやすく、また利害も一致しやすいであろう。一方、コミュニティ・ケアといったような役割について、どこに合意の契機を見出し、またどのように利害を一致させることができるのであろうか。その合意や利害の融和をみるために、地域への愛着や定住意識といったローカル・アタッチメントに——たとえそれが充分でないとしても——逢着せざるをえない¹⁰⁾。ともあれ、現在、住民がコミュニティ形成に合意し、彼らの利害が融和する理論的・現実的根拠が模索されている¹¹⁾。

ところで、住民のコミュニティへの期待の多様性は、本稿で析出した住民類型と密接な係わりがある。住民類型はライフ・ステージや属性などに規定されているであろう。そこで、住民のこうした生活様式上の相違に相応した、彼らの適切な配置が探求されなければならない。かくの如く、本稿で提起した分析枠組に則った調査を押し進めてゆく中で、住民類型論よりコミュニティ形成のための示唆を引き出すことができよう。

注

- 1) 倉沢, 1977 A, 1977 B, 1978.
- 2) 倉沢, 1968.
- 3) 鈴木, 1978.
- 4) 鈴木, 1978.
- 5) Greer, 1956 : 19-24. 2地区の調査結果の比較は表22の通りである。この論文は、都市住民の匿名性と地域との一体性の欠如などを一元的に強調するワースのアーバニズムのイメージに対して批判を提起したという意義があろう。倉沢は、次の論文でグリアの当該論文を紹介し、高都市化地区住民の生活様式を「プライベート派」、低都市化地区住民のそれを「人間関係派」と命名している(倉沢, 1971 : 122)。

表22 二つの地区の比較(低都市化地区と高都市化地区)

	低都市化地区	高都市化地区
近所付き合いスコアの高い人	67%	> 56%
地区内に友人を持つ人	50	> 29
友人のうち地区内に住む率	41	> 25
地区内文化行事への参加者	45	> 18
地区内団体への加入者	62	> 26
地区内住民を主な構成員とする団体への加入者	57	> 33
(夫)地区内団体への加入者	21	> 5
(夫)地区内住民を主な構成員とする団体への加入者	25	> 10
地区外団体への加入者	35	< 71
地区外住民を主な構成員とする団体への加入者	18	— 18
様々な地区の住民を構成員とする団体への加入者	23	< 45
(夫)地区外団体への加入者	73	< 86
(夫)地区外住民を主な構成員とする団体への加入者	23	> 12
(夫)様々な地区の住民を構成員とする団体への加入者	45	< 77
地区内リーダーを知っている	32	> 21
ロサンゼルスを知っている	38	— 37
親戚との行き来	週1回以上	49 — 55
	月1回以上	24 — 21
	年数回	11 — 8
	なし	5 — 9
	ロサンゼルスに親戚なし	11 — 7

- 6) 活動や付き合いの構造・機能的連関を敷衍したい。グラノベッターは、「紐帯の強さとは、(社会関係にある)時間の量、感情的な強さ、(相互の信頼に基づ

く) 親密さ、及び紐帯を特徴づける相互の貢献の合わさったものである」と定義している (Granovetter, 1973: 1361)。弱紐帯は、あまり大きな機能を果たしていないと予想されるかもしれない。しかし、強紐帯 strong tie で結びついている仲間と、別の強紐帯の仲間の間を「橋わたしする弱紐帯」 bridging weak tie が、社会移動、政治組織など諸々の状況で果たす大きな機能に、彼は注目した。強紐帯のみを持つ個人は、その仲間内の情報を熟知しているけれども、橋わたしをする弱紐帯を持っていないので、仲間の外の新しい情報を知ることができない。橋わたしをする弱紐帯を持っている個人は、仲間の外に存在する新しい情報や影響を、その紐帯を通して、容易に得ることができる。この理論に基づいて、グラノヴェッターは、職業移動をする際、弱紐帯は大きな機能を果たすことを調査で実証した (Granovetter, 1974)。このように、弱紐帯が非常に有効に機能する場合もある。それゆえ、活動や付き合いの実相 (構造) だけでなく、諸々の状況でこれらが個々の住民に対してどのように機能しているか、あるいはしうるのかを調査しなければならない。

7) 倉沢は前掲論文で次のように述べている (倉沢, 1968: 263)。「われわれは、従来の調査研究が、多くのばあい、規範としての市民意識を題目としつつ、実際には郷土愛的地域的連帯ないしローカル・アタッチメントを測定し、これにもとづいて、移動性の高い、定着性の低い来住市民の市民意識を低いものと断じてきたのを、誤りと考えた。そこで偏狭なローカル・アタッチメントを離れて、市民社会の市民として、どの地域に住もうと、そこに永住の意志の有無に拘らず、その地域社会を自発的共同によって向上せしめようとする態度をもって市民意識とした。」

筆者の理解によれば、彼がそこで市民意識と呼んだものは、「利害防衛型コミュニティ」意識、つまり権利意識にすぎない。中村は、倉沢による小金井市調査結果について、「その後間もなく小金井市で水道料金値下げの運動が成功したのはこの調査結果と無関係ではないであろう」と解説している (中村, 1973: 138)。しかし、水道料金値上げにより地域社会に共通の利益が侵されたので、地域への愛着や定住意識を持たなくとも、住民が自己の利益を防衛するために連帯し、その利害の一致した問題に対処したにすぎない。また、奥田が提示した「コミュニティ・モデル」の意識も権利意識にすぎないのではないだろうか (奥田, 1971)。このように、地域社会における利害の一致した問題についてのみ、住民が連帯し、対処できるにすぎないので、「限定的コミュニティ」なのである (中村, 1973: 40)。従来のコミュニティ意識研究の批判について、鈴木の前掲論文を参照 (鈴木, 1978: 15-18)。

- 8) 1)に掲げた論文を参照。
- 9) 再三、卑近な例を引用して恐縮であるが、会社に勤務する私の友人はマンションに住んでおり、隣人と全く面識がない。徒歩で20分位離れたマンションに妻帯した会社の友人が住んでおり、日常的に彼と相互扶助を行なっている。私の友人がそこへ引越す時も、会社の友人が手伝いに駆け付けた。一度、入院をしたが、会社の友人が会社を交替で休んで、看護した。その会社では、会社主催のパーティや同好会への参加などを通して、主婦同志が非常に懇意である。たとえば、子供を預けあったり、一緒にレクリエーションに出かけたりする。住域でなく職域を共有する、いわば「会社コミュニティ」が形成されている。その自律的な相互扶助システムが、一部の自己処理が困難な問題を処理している。筆者の経験は、金子の言説を首肯する (金子, 1976: 16)。
- 10) ローカル・アタッチメントに注目するこの主張は、鈴木らの立場に近いと思われる (鈴木, 1978; 小川, 1976: 金子, 1976)。
- 11) 地域への愛着や定住意識によって、コミュニティ内での合意や利害の融和をみることができるという予想を立てられうるかもしれない。しかし、コミュニティ間のそれが可能であるかどうか疑わしい。コミュニティの合意や利害の一致の契機を見出す作業として、園部の業績は注目される (園部, 1980)。

文 献 一 覧

- Granovetter, M. S.
1973 "The Strength of Weak Tie." *A.J.S.*, Vol. 79, No. 6
1974 *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers* (Harvard University Press)
- 金子 勇
1976 「市民参加と都市政治社会学」九州大学社会学会『現代社会学の成果と課題』
- 倉沢 進
1968 「近郊都市と市民意識」『日本の都市社会』福村出版
1971 「市民とコミュニティ」柴田徳衛・石原舜介 (編)『現代都市学シリーズ(1) 都市と住民』日本放送出版協会
1977 A 「都市的生活様式論序説」磯村英一 (編)『現代都市の社会学』鹿島出版会
1977 B 「生活の社会化」高橋勇悦他 (編)『テキストブック社会学(5) 地域社会』有斐閣
1978 「生活の都市化とコミュニティ」地方自治制度研究会 (編)『新コミュニティ読本』

- | ぎょうせい | 刊号 |
|---|--|
| 中村八朗
1973 『都市コミュニティの社会学』有斐閣 | 鈴木 広
1978 「コミュニティ論の今日的状況」鈴木広(編) |
| 小川全夫
1976 「地域社会に対する個別と普遍」九州大学社会学会『現代社会学の成果と課題』 | 『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』
アカデミア出版会 |
| 奥田道大
1971 「コミュニティ形成の論理と住民意識」磯村英一・鶴飼信成・川野重任(編)『都市形成の論理と住民』東京大学出版会 | (昭和55年9月14日～15日に北海道大学で開催された第53回日本社会学会大会において、本稿の内容を「大都市における社会生活上の居住性」という題目で、既に発表した。そこで頂戴した批評を参照しつつ、論文に纏めた。発表準備の段階で、寺田良一氏を始めとする都立大学社会学研究室の方々より、有益な御助言を賜ったことに感謝したい。ただし、文責は筆者にあることは言うまでもない。) |
| 園部雅久
1980 「街づくり運動の変容と適正技術論——もう一つの生活様式の検討のために——」東京都立大学大学院社会学研究会『社会学論考』創 | |

Local Attachment Reconsidered (II) —Patterns of Dwellers—

Masao Nobe

The purpose of this work is to clarify the pattern of participation in social activities and human interactions in a residential area, and how that participation relates to local emotional attachment to the area and the expectations of the quality of life there. Analysis of the data by Hayashi's qualification theory III reveals the following:

- (a) there is a factor of will that prescribes the participation in social activities and human interactions;
- (b) residents make distinctions and judgements on the kinds of interactions in which they participate, distinguishing between those they must devote themselves to entirely, and others that demand only a partial commitment;
- (c) emotional attachment to the area relates to active participation activities and interactions;
- (d) some residents choose an area because it offers them the opportunity to participate actively, and others choose an area where they anticipate that neighbors will not interfere with them.

These findings imply that there are two types of residents involved with different views of residential society.